

下野の倫理とエンパワメント

青木真兵

「ルチャ・リプロ」キュレーター

土着の第一歩が下野

撤退とは、下野することと見つけたり。

もともと、人間の社会は二つの原理によって成り立っていました。社会の内と外、此岸と彼岸、文明と自然、常識と非常識などなど。でも現代社会を生きるぼくたちは、前者の原理に取り込まれ、身動きがとれなくなっています。すべてを交換可能な商品にしてしまう、資本の原理によって世の中が動いているからです。二つの原理で生きていくためには、この資本による包摂から常に逃げ続ける必要があります。どちらか一つだけに所属するのではなく、

二つの原理を行ったり来たりすることで、問題を「なんとなく」暫定的に解決する。これが地に足をつけることであり、ぼくは土着と呼んでいます。

土着への第一歩が下野です。一般的に下野とは中央権力から降りることを意味します。例えば、明治維新の立役者の一人、西郷隆盛が政府の要職を辞めて故郷の鹿児島へ帰ることや、政治の世界で与党が野党に権力を明け渡す、政権交代が起きる時にも下野という言い方をします。でも現代における下野は、「社会の外を経験すること」と再定義したいと思います。そういう意味で、下野は二つの原理を行ったり来たりする、土着への第一歩なのです。だから下野は永遠ではないし、一度下野したからといって二度と戻れないわけではありません。現代における下野のポイントは、社会的価値があったり評価されるものから距離を取り、いったんそれらに価値を置かない経験すること。分かりやすく言うと、他者の「ニーズを気にしない」ことだと言えます。

2016年、ぼくたちは奈良県東吉野村という人口約1700人の山村に移り住みました。その自宅を開いて、人文系私設図書館ルチャ・リプロを運営しています。このルチャ・リプロのルーツが、2014年から週に一回のペースでインターネット配信を続けている「オムライ斯拉ヂオ」です。「オムラヂ」は誰が何人くらい聴いているのかとか、何時ごろ、どの地域で聴かれているのかなど、全く調べていません。社会の内側であれば、マーケティング

をして、より多くの人に聴いてもらえるように工夫するはずですが、あえてそういうことをしていません。喋りたいことだけを喋る、聞きたいことだけを聞く形式で、約8年間配信し続けています。最初に比べればリスナーも増えたとは思いますが、どのくらい増えたのか、どのようなコンテンツが求められているのかについて、知ろうとは思っていません。でもそれで良いのです。ぼくは「社会の外」としての場所を作りたかったからです。

「分かっちゃいるけど やめられねえ」

ぼくたちの自宅兼図書館であるルチャ・リプロの活動も、この延長線上にあります。つまり誰かのニーズがあつて、自宅を図書館にしているわけではありません。誰に頼まれたわけでもなく、約6年間ルチャ・リプロを開館し続けています。あえて言うならば、かつて図書館で働いていた多くの妻のためという理由はありますが、それは数値化できるような抽象的なニーズではありません。つまりぼくたちは、勝手に自宅を図書館と名乗り、本の貸出を行っているだけなのです。置いている本も、ぼくたちが読みたい本だったり、あの人におすすめしたい本だったり、徹底的に主観に基づいています。それによって、継続できている、このの方が重要なのです。

つまり現代における下野とは、他者のニーズを気にせず、とにかく徹底的に主観を認めることだと言えます。周りからみて意味がないとか、何のためにもならないとか、そういう話ではありません。村に移り住めば社会の外に出れるわけでもないし、村には村の強固な社会があります。反対に、都市にいるからといって下野できないわけではない。そもそも、社会の外とは何なのでしょうか。そのヒントは、「ついしてしまふこと」にあります。人は誰しも、誰に頼まれたわけでもないのに、ついしてしまふことがあるはずで。例えば、高度経済成長期に一世を風靡したバンド「ハナ肇とクレージーキャッツ」は「スーダラ節」のなかで以下のように歌っています。

チヨイト一杯の つもりで飲んで

いつの間にやら ハシゴ酒

気がつきゃ ホームのベンチでゴロ寝

これじゃ身体に いいわきゃないよ

分かつちやいるけど やめられねえ

分かつちやいるけど、やめられねえ。ここにこそ、下野への扉があります。もちろん依存

症レベルになってしまっているのであれば、すぐに医療機関に赴いてください。でもそうでないのであれば、ここにヒントがあります。なぜなら、「分かつちやいるけど」は社会の内側、「やめられねえ」が社会の外側を意味するからです。一人の人間に当てはめると、「分かつちやいるけど」が社会人としての部分、「やめられねえ」が生き物としての部分とも言えます。なぜ撤退ではなく下野と表現するのか。それは野に下ることによって、発展の過程で捨て去ってきた、生き物の部分を取り戻すことを意図しているからです。現代社会は「分かつちやいるけど」を中心に作られ、「やめられねえ」が置き去りにされてきたのです。

ぼくたちの社会の問題点

そもそも、ぼくたちの社会の問題点とは何なのでしょいか。それは現代日本人が信じ込んでしまっている、どこかに標準があるはずだという信仰です。この標準信仰の問題点は、どうやったらこの難局を乗り越えることができるか、という「手段」をまず考えてしまうことです。つまり、標準という「答え」があることを前提に話を進めてしまうことで、なぜこのような事態に陥っているのか、そもそもどういう事態なのかを問い直す機会が与えられないのです。事態が依って立つ前提を疑うことは、前例のない時代において不可欠な態度である

にもかかわらず、です。

この標準信仰は、明治時代以降の中央集権的な国家構想のなかで形作られ、増え続けた人口がその定着を後押ししました。目指すべき標準を国家が作り提供し、そのモデルに適応していく。そうすることで国民に、そして社会の正式メンバーに認められていく。確かにこのモデルは幕末以降の西欧列強の外圧に対して、また太平洋戦争後の焼け野原からの復興において、一致団結するためには有効だったと思います。しかしこれからはそうではありません。明治において西欧列強の国民国家というシステムや、昭和において戦勝国であるアメリカ合衆国の資本主義経済をベースとした自由主義のような、目指すべきモデルはなくなってしまうのです。

現代において、ぼくが最も問題だと思っているのは自殺者の多さです。平成10年以降14年連続して3万人を超える状態が続いていました。近年は減少傾向にあり、昨年（令和2年）は約2万1千人と減少傾向にあること自体はとても良いことですが、諸外国と比較すると年間自殺者数や自殺死亡率も高い状態が続いています。この自殺者の多さの背景には、現実に変化しているにもかかわらず未だに従来の標準信仰に縛られてしまうことで、人びとの選択肢が大きく狭められてしまっていることが影響しているのではないのでしょうか。

生き物としての部分に気づく

『山奥ニート』やっています。（光文社）を書いた石井あらたさんは、「山奥ニート」と称して山奥で生活費を下げた暮らしをすることで、自分たちなりの生活を作り出しています。しかし学生時代を回想するなかで、死にたくなった経験、引きこもりになるきっかけがあったといいます。この経験は、多くの問題視する標準信仰と関わりがあるのではないかと思っています。それは石井さんが教員を目指していた大学生のころ、教育実習のできごとがきっかけでした。担当だったベテランの先生と馬が合わず、少しのミスで何時間も叱られたといいます。その結果、石井さんの精神は壊れてしまいます。

常に頭をよぎっていたのは、「この程度のことができないなら、他のこともすべて上手くできるわけがない」ということだった。別に授業案や報告書が書けなくても、そんなことで思い詰めることはないのに。どうも鬱つてものは、精神的に盲目にしてしまうみたいだ。他の選択肢が見えなくなって、ひとつのことが上手いかないだけで、自分にはあらゆる価値がないように思えてしまう。自分の存在する意味がわからなくなってしまうから、死にたくなる。（中略）自殺するくらいなら辞めればいい、なんて簡単に言

うけど、そんなこと無理だ。精神的に追い詰められていると、正常な判断ができない。

(157・158頁)

下野において大切なことは、社会人としての部分は放っておいて、生き物としての部分に気がつくこと。でもそれは弱く脆いものです。「山奥ニート」の石井さんは、特に標準信仰の強い教員になるプロセスである「教育実習」において、生き物としての部分を傷つけられてしまった。でもこのように過敏で壊れやすい弱い部分があることは、甘たれていて軟弱なことと批判されるべきなのでしょうか。誰もが屈強で鈍感な社会人として生きていかなければならないのでしょうか。ぼくは全くそうは思いません。

でも近代以降、労働によって賃金を得たり、あつちからこつちに動かすだけで金を生み出したり、とにかくお金を得ることができる人のことを社会人と称して、それを生み出さない生き物の上位に置き続けてきたのです。ぼくたちが目指すのは生き物の復権です。でもそれは社会をめちゃくちゃにして瓦礫の上でガッツポーズをするのではなく、ぼくたち自身が社会人と生き物を行ったり来たりしながら生きていけるよう、生き物の部分をエンパワメントし合うこと。エンパワメントとは、そのものが本来持っている力を信じ、その開花を支援することを意味します。

「やめられねえ」を持った人、寅さん

人間の中にある生き物の部分こそ、近代が捨て去ってきた「やめられねえ」です。近代は男性が社会で働き、女性が家庭でそれを補佐することが標準の形でした。家事の機械化やアウトソーシングが進むと状況は変わりますが、女性や高齢者、障害者や外国人などは、その社会の正式メンバーとはみなされませんでした。彼らは子どもを生むことができたり、年をとっていたり、障害があつたり、国籍が異なっていたり、生き物としての「やめられねえ」を持っている人たちだからです。

「分かつちやいるけど」と「やめられねえ」の間の葛藤を描いた作品に、山田洋次監督『男はつらいよ』があります。1969年に封切られてから、1995年まで毎年連続して上映されてきました。『男はつらいよ』の主人公、車寅次郎（通称寅さん）は定職につかず、日本各地を転々としながら縁日などで「売」をして生計を立てています。そして頃合いを見計らって団子屋を営む実家に帰ってきます。しかし温かく迎えてくれると思っていた地域や家族は、寅さんが思ったような仕方では出迎えてくれなかったり、家庭内の些細なスレ違いが喧嘩に発展、寅さんは捨て台詞を吐いて家を出ていってしまいます。このくだりが『男はつらいよ』では繰り返し描かれています。

仲良くしたいのにできない。分かっていてもまた故郷に戻ってきてしまう。かと思っていたら、温かい家族がいるのにどうしても旅に出たくなってしまふ。手の届きようなない、付き合えるはずのない人を好きになってしまふ。こんなことを繰り返す寅さんは、「分かっちゃいるけど、やめられねえ」人なのです。この点がギュッと凝縮された作品が、第六作『男はつらいよ 純情篇』です。寅さんは旅先の長崎で赤子を連れた若い女性に同情し、彼女の実家がある五島へ同行します。女性は駆け落ち同然で家を飛び出したのですが、三年ぶりに帰ってきた娘に対し、父親は夫の元に帰るよう言います。その理由を聞いた寅さんは深く納得し、以下のように伝えます。

「おじさんの言うとおりでよ。帰れるところがあると思うからいけねえんだよ。失敗すりゃまた故郷（くに）に帰りゃいいと思ってるからよ。俺はいつまで経っても一人前になれねえもんな、おじさん」

そして寅さんは、故郷である葛飾柴又について父親と語り合っているうちに、実親はなくなった自分には親代わりのおいちゃんとおばちゃんがいること。妹は自分とは全く違う真面目な亭主や息子もいて、幸せに暮らしていること。だんだんと心温まる情景を思い出し

てしまいます。

「おれは二度と帰らねえよ。いつでも帰れるところがあると思うからいけねえんだ。」

と自分に言い聞かせます。でもそうこうしているうちに、最終の渡し船が出航する汽笛が鳴ってしまいます。

「おれは帰らねえ。どんなことがあつたつて二度と帰りゃあしねえよ。帰るところがあると思うからいけねえんだ……でもよ、俺帰るとおいちゃんとおばちゃんたち、喜ぶしなあ。さくらなんか、お兄ちゃんバカね、どこ行ってきたの、なんて目にいっぱい涙ためてそう言うんだ。それ考えるとやつぱり、帰りたくなっちゃうよなあ……でも、あたくしは二度と帰りませんよ……でも、やつぱり帰るなあ！ あばよ！」

と寅さんは満面の笑顔で駆け出してしまいます。まさに「分かっちゃいるけど、やめられねえ」を体现する場面です。女性を宮本信子、その父親を森繁久彌が演じている名シーンですので、ぜひ一度ご覧ください。さて、そうして故郷に帰った寅さんは、おばちゃん

んの親戚の女性に一目惚れしてしまいます。その様子が地域に知れ渡り、笑いものにされていることを知った妹のさくらが、「どうしてお兄ちゃんは世間から笑われるようなことをするの?」と問います。それに対して寅さんはこんな風に返します。

寅さん「いや、頭の方じゃ分かっているけどね、気持ちの方がそうついてきちゃくれねえんだよ。ねえ? だから、これはおれのせいじゃないよ。」

さくら「だって、その気持ちだってお兄ちゃんのものでしょうか?」

寅さん「いや、そこが違うんだよ。早え話がだよ、俺はもう二度とこの柴又へ戻ってこねえとそう思ってもだ、な、気持ちの方はそうは考えちゃくれねえんだよ。アツと思うと、またオレはここへ戻ってきちゃうんだよ。本当に困った話だよ。」

頭では分かっているけど、気持ちの方がついてこない。ぼくはこういう寅さんのような人間の方が健全だと思っています。それは人間における生き物の部分が、ちゃんと機能しているからです。生き物の部分がちゃんと機能していると、頭と気持ちが食い違っていることがある。

それが普通です。しかし現代社会を眺めてみると、資本の原理によってどんどん「頭」の方に画一化が進んでいます。定職につくこと、周りと同じような家に住み、同じような生活を送ることが国策として推奨されてきました。確かにその結果、経済は発展し人びとの暮らしは自由で快適なものになりました。ただもう一つの原理である、生き物の部分はずつとないがしろにされてきました。生き物の原理が機能していない人間、寅さんの言う「さしずめインテリ」ばかりになってしまった現代において、生き物の部分を取り戻す。これこそぼくたちが、いったんは下野しなければならない理由です。

「分かっちゃいるけど やめられねえ」を全肯定する

ぼくは障害者の就労支援の仕事をしています。身体の一部が欠損していたり機能していない身体障害や、知能指数が一定よりも低い値の知的障害、また幻聴が聴こえたり、幻覚が見える統合失調症や、気分の上がり下がり激しい双極性障害などの精神障害。また能力の凸凹が大きい発達障害もあります。この「障害」とは、社会との関係において「標準に適應することができない」という意味で使われています。そういう意味では、寅さんは「障害者」であったといえるでしょう。

現代社会では生き物の部分がきちんと機能している人ほど、誰もが「障害者」になる可能性があります。むしろ生きづらさを抱えていることが、逆説的にその人のなかに生き物としての部分がきちんと息づいていることを示しているのです。しかし生き物が生きづらい社会には、最終的に何が残るのでしょうか。人が社会人として生きていこうとすればするほど、社会自体は持続不能なものになっていきます。なぜなら、生き物が生存できる余地がなくなっていくからです。やっぱり、そんな社会は間違っています。持続可能性というならば、社会人としての振る舞いを抑制し、自分の内外の生き物が生きやすい環境をつくること。そのためには、「障害」と呼ばれるものへの解像度を上げる必要があります。その生き物の部分は、標準化され得ない具体的な個人の事情に、ていねいに耳をそばだてることでしか現れてこないからです。

これからは寅さんが笑われるような社会であってはなりません。迷惑をかけないよう、各自が集団に合わせるのではなく、個人個人の事情によって集団が変化することが当たり前の社会へ。放っておくと「分かっちゃいるけど」の原理に統一され、「さしずめインテリ」ばかりになってしまいう現代において、寅さんは「やめられねえ」を定期的に思い出させてくれる貴重な存在なのです。

「分かっちゃいるけど、やめられねえ」をまず全肯定する。それが下野の第一歩となります。